

北海道大好き！～アイヌ語ゆかりの北海道の地名(第10回)

当社は、7月12日に白老町にオープンしたアイヌ文化復興等に関するナショナルセンター「民族共生象徴空間(愛称:ウポポイ)」の「交流促進官民応援ネットワーク」に参画しています。

先住民族が使っていたアイヌ語を起源とした地名が多く残る我らのふるさと北海道。北海道で使う電気を生み出している発電所所在地の地名などについて、その由来をご紹介します。どうぞお楽しみに。

第10回目は、礼文島の発電所です。

礼文(レブン)

南北に細長く、日本最北の有人島である礼文島。現在、島では約2,500名の方が暮らしています。

礼文島は「花の浮島」と呼ばれるのに相応しく、季節になると約200種類以上もの高山植物が咲き乱れることから、花を鑑賞しながらのトレッキングが人気を集めています。



礼文島の礼文発電所(内燃力)

前回、利尻島の電力供給は水力発電所と内燃力発電所が担っていることをご紹介しましたが、礼文島は水力発電所がなく、礼文発電所(4,450kW)の内燃力発電所だけで島の電力供給を支えています。

ちなみに北海道の他の有人島で内燃力発電所がある島には、奥尻島と焼尻島があります。奥尻発電所(4,000kW)、焼尻発電所(1,110kW)の内燃力発電所がそれぞれ活躍しています。

一方、天売島には一切発電所がないため、焼尻発電所で発電した電気を海底ケーブルによって5.5km離れた天売島に供給しています。

さて、礼文島の「レブン」は、レブン・シリ(repun-shir 沖の・島)だとされています。(宗谷からみて)利尻島よりもさらに先の海にあることからこう言われていたとされています。

「レブン」にちなむ地名は他にも見られます。例えばJR礼文駅があるのは道南の豊浦町。ここにある礼文華(れぶんげ)は、「レブン・ケ・プ(repun-ke-p 沖の方へ・削る・もの)」に由来するとされています。礼文華の大きな断崖がそう呼ばれたのだとされています。

(出典:山田秀三「北海道の地名」)